

文庫あれこれ◆4月の文庫開館一週間前、東京の桜満開。満開の桜は一つ一つの花が身厚でそれぞれが私は咲いているわよと青空に向かって自己主張しています。でもなぜか私にとって桜の原風景は、小高い山を埋め尽くす薄桃色、クレパスで横にさーさーと描いたピンク。それは今にも散りそうに風に揺れ流れるようなうすピンクの遠景。散り際の美しさにこがれます。「散るを見て帰る心や桜花、むかしに変わるしるしなるらむ」(西行) ◆桜守の藤右衛門さんは言います。「それでも春は必ず来ますのや」(今月の新刊より)

◆新学期が始まりました。大室で伊豆高原で春休みを過ごした福島の子もたちは元気に通学しているでしょうか。お世話したみなさまご苦労さまでした。世田



その折にあげたCD「福島から伝えたい」は、各地の友人を通してその地の人々にも子どもたちの歌の思いが広がっていると聞いています。お聴きになりたい方、お求めになりたい方はお申し出ください。◆2012年度本屋大賞は三浦しをん著『舟を編む』でした。文庫にはrequestを入れて、すでに数人の方が読んでいらっしゃるようです。◆今度スタッフの発案で5月のおはなし会のあと、「読んだ本を着にお話ししましょう会」をいたします。一服しながらおしゃべりいたしましょう! ◆伊豆へ来る車中で、同年輩と思しき前席のお二人が旅の話から読書の話へ移り、聞くとはなしにかつ興味深く聞かせてもらいました。昔読んだ本が今再読するとまた違った味がする等々◆伊豆高原に近づくほどに、若緑が目映ります。そして文庫に着くと、スマイル、クリスマス・ローズ、雪柳が咲き、上の花壇に新しい草花(名を知らぬ)がすくと伸び始め、だんだん個性のある庭になりつつあります。Fさん感謝◆さあ、今月のトイレの花は何でしょう、楽しみですMさん! ◆巻頭のスカイツリーは夫さんからの送信写真◆文庫便りを作るとき、季節にあう詩を探します。そして詩の棚の前でいろいろな人の詩をばらばら読みしていつか詩の世界に浸る至福。◆児童書の福音館書店のもと社長・編集長松居直さんにインタビューする機会がありました。子ども時代に体験した喜び・楽しみがやがて生きる力になるのだと言われました。「急いだら人は育たんで。不揃いの中で育つのが一番や」(小川三夫著・今月の新刊より)。みんなのびのび育ってね!(西村)

◆2012・文庫の催し物◆

☆若葉のころのおはなし会☆

5月19日 午後5:30~7:30(大きい人向け)

1部: 昔話+創作

2部: 読んだ本について語りましょう会

♥新たに2部を設けます、ぜひおしゃべりしましょ!

5月20日 午前10:30~11:30(子ども向け)

読み聞かせ・子どもたちのおはなし

(アートフェスティバル参加16~20日)

☆海の日のおはなし会☆

7月15日 午後5:00~7:30 伊豆高原駅・大楠の下

♥文庫開館記念子どものためのおはなし会♥

7月16日 午前10:30~12:00

♪秋の夜長のおはなし会♪

10月20日 午後5:00~7:00(おとなの人向け)

〔秋のおはなし会〕

10月21日 午前10:30~11:30(子ども向け)

◆5月は変則16日(水)~20日(日)開館

◆6月は通常16日(土)、17日(日)

◆7月は通常14日(土)、15日(日)

☆15日は夕から、海の日のおはなし会☆

海の日16日(月)は、開館記念日

◆8月は、15日(水)~19日(日)

☆夏休みロングオープン☆

◆9月は通常15日(土)、16日(日)

※文庫の時間: 土曜日は午後2時~5時、日曜日は午前10時~午後3時

※毎月開館日の日曜には、「子どものための小さなおはなし会」があります。

午前10:30~11:00

《楽しんで読み聞かせ・頑張っておはなし》

おはなし・沙羅の勉強会は

毎月第3土曜11:00~13:00

伊豆高原便りは今月はお休みしました。皆さんの身近な楽しいホット原稿、お待ちしております。

atsuko@big.or.jp 又は03-3709-7840 FAXまで

連絡先: 沙羅の樹文庫

☎0557-51-3737

沙羅の樹文庫だより



桜の向こうにスカイツリー(浅草・浅草寺付近より)

(後藤竜二・作 長谷川知子・絵 ポプラ社)



小学校、中学校、高校、大学、そして就職…、
すべてのフレッシュマン、がんばれ!

新しく入った子どもの本 2012. 4

絵本：『ペロペロキャンディー』（ルクサナ・カーン文 ソフィー・ブラッコール絵 もりうちすみこ訳 さえら書房 11）『ぎょうれつぎょうれつ』（マリサビーナ・ルッツ絵と文 青木久子訳 徳間書店 11/25刷）『カンガルーには、なぜふくろがあるのか』（ジェームズ・ヴァンス・ファイアブレイス絵 百々佑利子訳 岩波書店 11）『おかあさんとわるいキツネ』（イチンノロブ・ガンバートルぶん バーサンスレン・ポロルマーえ つだのりこやく 福音館書店 11）『あかいぼうしのゆうびんやさん』（ルース・エインズワース作 福音館書店）『みつつのねがいーエストニアの昔話』（ピレット・ラウド再話・絵 福音館書店 12）低学年の読み物：『ありのフェルダ』（オンドジェイ・セコラさく/え 関沢明子やく 福音館書店 08）『おばあちゃんのすてきなおくりもの』（カーラ・スティープンスさく 掛川恭子やく のら書店 12/25刷）『ぼくとおじいちゃんとハルの森』（山末やすえ作 くもん出版 12）高学年読み物：『死の影の谷間』（ロバート・C・オプライエン著 越智道雄訳 評論社 10）※核戦争後、生き残った2人……。『もういちど家族になる日まで』（スザンヌ・ラフルーア作 徳間書店 11）『ロス、きみを送る旅』（キース・グレイ作 徳間書店 12）

新しく入ったおとなの本 2012. 4

フィクション：『震える牛』（相場英雄著 小学館 12）『眺望絶佳』（中島京子著 角川書店 12）『ナミヤ雑貨店の奇跡』（東野圭吾著 角川書店 12）『満つる月の如しー仏師・定朝』（澤田瞳子著 徳間書店 12）『母の遺産ー新聞小説』（水村美苗著 中央公論新社 12）※request 『三匹のおっさんふたたび』（有川浩著 文藝春秋 12）『ダーク・スター・サファリーカイロからケープタウンへ、アフリカ縦断の旅』（ポール・セロー著 北田絵里子/下村純子訳 英治出版 12）ノンフィクション：『日本の文脈』（内田樹・中沢新一著 角川書店 12）『愚民社会』（大塚英志・宮台真司著 太田出版 12）※request

最近お借りした本についての読後感

2012年4月12日 By 森林浴

「悪い娘の悪戯」マリオ・バルガス・リョサ著 八重樫克彦ほか訳 作品社刊 2012年2月刊

バルガス・リョサの小説はどれも長い。舞台は1950年代のペルーの首都リマの高級住宅地ミラフロレスから始まる。ペルーの裕福な家に育った少年がそこで一目惚れした女の子は、実はその場所に不似合いなりマ下町の貧困家庭の子であり、強烈な上昇志向を隠し持っていた。主人公と女は絡み合いつつ、舞台はその後、パリ、ロンドン、東京、マドリッド、最期は南仏の田舎町へと移って40年間。女は見事な悪女であり、次々にいろいろな男をたぶらかして金を奪い、上流階級に紛れ込もうとする。しかし主人公は女の正体を分かっているが最期までこの悪女に木の字で、ついに縁が切れなかった。英国を去った女は東京でフクダという変態性欲者のやくざにからみ取られるが、女の関係した男の中で、このフクダが最も恐ろしい男として描かれており、彼のおかげで結局女は死に向かって落ちてゆくことになる。ただし「官能小説」と騒がれた小説なのに、私はこの女性に最期までついに魅力を感じることがなかった。（主役の女性に魅力を感じない愛欲がらみ小説はあまり面白くないものである。）見事な構成の傑作とは思いますが、ノーベル賞作家バルガス・リョサはこういう愛欲がらみの小説はあまり巧くないのではないのかな、などと不遜にも思ったりした。ペルーの首都リマの高級住宅地ミラフロレスの近くで3年を過ごした私には、ペルーに関した記述がやけに懐かしかった。八重樫夫妻の翻訳は読みやすくてよい。

新書：『桜守三代ー佐野藤衛門口伝』（鈴木嘉一著 平凡社 12）『怒れ! 憤れ!』（ステファン・エセル著 村井章子訳 日経 BP マーケティング 11）『福島第一原発ー新装と展望』（アーニー・ガンダーセン著 岡崎玲子訳 集英社 12）

文庫：『不揃いの木を組む』（小川三男著 塩野米松聞き書き 文藝春秋 12）『小熊秀雄詩集』（小熊秀雄著 岩波書店）『偏愛京都』（マツモトヨコ著 小学館）寄贈：『解錠師』（スティューヴ・ハミルトン著 越前敏弥訳 早川書房 11）『番犬は庭を守る』（岩井俊二著 幻冬舎 12）

「山本周五郎 戦中日記」 山本周五郎著 角川春樹事務所刊 2011年12月刊

2月の読後感でドナルド・キーン著「日本人の戦争」に触れた。これはわが国の作家の戦争中の日記に関する集大成であったが、それには山本周五郎の日記については記述がない。

山本周五郎のこの日記の出版は、監修者の竹添敦子の「監修の言葉」によれば、竹添氏の強い懇請によって山本周五郎の次男、清水徹氏の特別の好意によって資料の提供を得て、やっと実現したもののようだ。この本は太平洋戦争の始まった1941年（昭和16年）から戦争が終わった1945年（昭和20年）に亘る5年間の日記である。（大半は昭和19年のもの）

戦争が日本の敗色が濃くなってきた1943年（昭和18年）時、山本周五郎は40歳、作家として油の乗り切った豊稷の時期で、「日本婦道記」が直木賞に選ばれたが、彼は授賞を辞退している。彼は面白い人で、後の昭和34年に「縦の木は残った」が毎日出版文化賞に選ばれたのも辞退し、さらに昭和36年に「青べか物語」が文芸春秋読者賞に選ばれたときもこれを辞退しているのである。山本周五郎は此のころ東京の馬込に住んでいて、空襲で直接の被害を受けなかったが、驚くのは、間断ない米軍の空襲の中で、隣組の防空班長をやりながら、小説を書き続け、出版社は原稿を取りに来る。毎日のように酒を飲み、家族の心配をし、自分の死を考える一方で、戦意を高揚させている。永井荷風の日記のように、出版されて世に出るようなことを予想した日記でなく、あくまで自分用の記録であったと思われる。昭和20年2月に突然日記が終わる。その後戦争が敗戦に終わり、妻が死亡し、長男が東京大空襲で行方不明になるがそのあたりの日記は無いらしい。

書架には・・・

スピルバーグの『戦火の馬』は観られましたか？ この原作者はマイケル・モーパゴです。イギリスの作家で、たくさんの児童文学を書いています。文庫にはほかに『兵士ピースフル』『ザンジバルからの贈り物』『ケンスケの王国』があり、特に『兵士ピースフル』は衝撃を受けました。お勧めです。『モーツァルトはおことわり』（絵本）も入っています。読んでみませんか。（さ・ら）